

DAS KAPITAL

資本論

カール・マルクス

社会科学研究所 監修
資本論翻訳委員会 訳

7

新日本出版社

カール・マルクス

資 本 論

7

第二卷 第三分冊

社会科学研究所 監修
訳

資本論

資 本 論——第7分冊（全14冊）

1985年3月15日 初 版

定価 850円

監修者	日本共産党中央委員会付属 社会科学研究所
訳者	資本論翻訳委員会
発行者	松 宮 龍 起

	郵便番号 151 東京都渋谷区本町1-8-7
発行所	株式会社 新日本出版社
	電話 東京 (320) 7111
	振替番号 東京 3-13681
	印刷 光陽印刷 製本 みさと製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

凡 例

一 本書は、カール・マルクス著『資本論』第一―第三部の全訳であり、新書判全一三分冊で刊行され、総目次・総索引を収めた別冊がこれに加わる。

二 翻訳にあたっては、ドイツ語エンゲルス版を主たる底本としてドイツ語各版のほか、英語版、フランス語版、ロシア語版その他各国語諸版を照合または参照の上、訳出した（訳出に使用された各国語諸版については本凡例末参照）。また、従来の邦訳はすべて参照した。

三 注については、マルクス、エンゲルスによる原著者注は（ ）に漢数字を用いてそれを示し、各段落のあとに訳出した。なお、訳文中や、*印によつて訳文のあとに、「」を用いて挿入されたものはすべて訳者による注および補足である。これらは今回の訳出にあたり独自に作成された。

四 訳注のなかで、「邦訳『全集』、第〇巻、〇〇ページ」とあるのは、ドイツ民主共和国ディーツ社発行の『マルクス・エンゲルス著作集^{ツエルケ}』を底本とした邦訳『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）の巻数とページ数をさしている。

五 『資本論』のドイツ語原文にあたらうとする読者の便宜のために、わが国で現在入手の容易なヴェルケ版『資本論』（ディーツ社）の原書ページ数を、訳文の欄外上に（ ）を用いて付記した。

六 訳文中の“ ”でくくられた語、句、文は、すべて、原著者によってドイツ語以外の国語（ラテン語などを含む）が単独で使用されている個所の訳である。なお、それらドイツ語以外の国語による語、句、文が、同じ意味のドイツ語と併記されていて、相互の言い換えとして使用されている場合には、それらにニュアンスの相違がある場合をのぞき、該当の他国語の訳出や明示を省略した。文意を理解するうえで必要な場合には、原語がそのまま示されている。

七 原著者の引用文にその原典との相違がある場合には、原則として原著者の引用により訳出し、必要な場合には訳注によりその異同を示した。

八 引用文献のうち邦訳のあるものは、入手の便宜なども考慮し、適当と思われるものを「」を用いて掲げた。ただし、訳文については、掲げた邦訳書のそれに必ずしもよっていない。

九 訳文で、傍点を付した部分は原文のイタリック体の部分を表わしている。

一〇 人名、地名等については、それぞれの国での発音の再現につとめたが、わが国での慣用に従ったものもある。

二 本訳書については日本共産党中央委員会付属社会科学研究所が監修を行なった。研究所の委嘱により、五〇名を超える研究者が訳出に参加し、翻訳のための委員会が組織され、さらに経済学以外の領域の研究者多数の協力を得た。翻訳者は各分冊ごとに訳出グループを編成し、すべての分冊にわたる全体の協議会、分冊グループ内あるいは若干の分冊グループ相互の検討会が行なわれ、分冊ごとに作成された訳稿を、さらに独自に編成された全巻にわたる編集・統一者グループがあらため

て全体との関連から詳細に検討を加えたうえ、分冊グループとの協議を繰り返して完成稿とした。それらの作業の過程で、経済学以外の学問の研究者から提出された意見が参考にされた。

本分冊（第七分冊）については、各分野の研究者の協力を得ながら、左記の体制で訳出・編集が行なわれた。

訳出グループ 鶴田満彦（代表・第二〇章第一一節） 渋谷 将（第一八一—一九章、第二〇章第一

二—三節） 市原健志（第二章）

編集・統一者 岡本博之 宇佐美誠次郎 土屋保男 杉本俊朗 朝野 勉

（付）第二巻の翻訳にあたって使用された各国語版

ドイツ語版については、初版、第二版、カウツキー版、アドラツキー版、ヴェルケ版を利用し、また、以下の各国語諸版を照合または参照した。英語版（モスクワ版、ペリカン版、カー版、ゾンネンシャイン版）、フランス語版（エディシオン・ソシアル版、シアール版、コスト版）、ロシア語版（サチネーニャ版（第二四巻、第四九巻、第五〇巻）、ステパーノフ版）、スペイン語版（シグロXXI版、エディトリアル・カルタゴ版、フォンド・デ・クルトゥーラ・エコノミカ版）、イタリア語版（リウニティ版、リナーシタ版）、中国語版、朝鮮語版、ポーランド語版、チェコ語版、ハンガリー語版、ルーマニア語版、ブルガリア語版、ほか。

目次

第三篇 社会的総資本の再生産と流通	五五五
-------------------	-----

第一八章 緒論	五五五
---------	-----

第一節 研究の対象	五五五
-----------	-----

第二節 貨幣資本の役割	五六〇
-------------	-----

第一九章 対象についての従来の諸叙述	五六八
--------------------	-----

第一節 重農主義者たち	五六八
-------------	-----

第二節 アダム・スミス	五七四
-------------	-----

1 スミスの一般的観点	五七四
-------------	-----

2 スミスによる交換価値の $\lambda + \mu$ への分解	五七七
------------------------------------	-----

3 不変資本部分	五九二
----------	-----

4 A・スミスにおける資本と収入	六〇一
------------------	-----

5 総括	六二一
------	-----

第三節 その後の人たち……………六二九

第二〇章 単純再生産……………六三四

第一節 問題の提起……………六三四

第二節 社会的生産の二大部門……………六三〇

第三節 両大部門間の交換—— $I(v + m)$ 対 IIc ……………六三五

第四節 大部門IIの内部での交換。必要生活諸手段と奢侈品……………六四一

第五節 貨幣流通による諸交換の媒介……………六五七

第六節 大部門Iの不変資本……………六七四

第七節 両大部門における可変資本と剰余価値……………六七九

第八節 両大部門における不変資本……………六八五

第九節 A・スミス、シュトルヒ、およびラムジーへの回顧……………六九三

第一〇節 資本と収入——可変資本と労賃……………六九九

第一一節 固定資本の補填……………七二八

1 貨幣形態での摩滅価値部分の補填……………七三四

2 “現物での”固定資本の補填……………七三三

3 結 論……………七四九

第二二節 貨幣材料の再生産	七五三
第一三節 デスチュト・ド・トラシの再生産論	七五三
第二章 蓄積と拡大再生産	七九一
第一節 大部門Ⅰにおける蓄積	七九六
1 蓄藏貨幣の形成	七九六
2 追加不変資本	八〇三
3 追加可変資本	八二一
第二節 大部門Ⅱにおける蓄積	八二三
第三節 表式による蓄積の叙述	八二九
1 第一例	八三七
2 第二例	八三五
3 蓄積にあつてのⅡ ^c の転換	八四五
第四節 補 遺	八四九

第二卷分冊目次

第一分冊

第二部 資本の流通過程

第一篇 資本の諸変態とそれらの循環

第一章 貨幣資本の循環

第二章 生産資本の循環

第三章 商品資本の循環

第四章 循環過程の三つの図式

第五章 通流時間

第六章 流通費

第二分冊

第二篇 資本の回転

第七章 回転時間と回転数

第八章 固定資本と流動資本

第九章 前貸資本の総回転。回転循環

第一〇章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。重農主義者たちとアダム・ス

ミス

第十一章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。リカードウ

第十二章 労働期間

第十三章 生産時間

第十四章 通流時間

第十五章 資本前貸しの大きさによぼす回転

時間の影響

第十六章 可変資本の回転

第十七章 剰余価値の流通

第三分冊

第三篇 社会的総資本の再生産と流通

第十八章 緒論

第十九章 対象についての従来の諸叙述

第二〇章 単純再生産

第二十一章 蓄積と拡大再生産

(351)

第三篇 社会的総資本の再生産と流通*

*〔第二章稿では「流通過程と再生産過程との現実的諸条件」と題されている〕

第一八章^(三四) 緒 論

(三) 第二章稿より。

第一節 研究の対象

資本の直接的生産過程は、資本の労働過程および価値増殖過程であつて、商品生産物を結果とし、剰余価値の生産を規定的動機とする過程である。

資本の再生産過程は、この直接的生産過程を包括するとともに、さらに、本来の流通過程の両局面、すなわち、周期的な過程として——一定の期間をもつてつねに新たに反復される過程として——資本

新華書店

の回転を形成する総循環をも、包括する。

ところで、この循環を $G \cdots G^{*1}$ という形態で考察しても、 $P \cdots P^{*2}$ という形態で考察しても、直接的生産過程 P は、つねにそれ自身、この循環の一つの環をなすにすぎない。一方の形態では直接的生産過程が流通過程を媒介するものとして現われ、他方の形態では流通過程が直接的生産過程を媒介するものとして現われる。直接的生産過程の恒常的な更新、すなわち生産資本としての資本の恒常的な再現は、どちらの場合にも、流通過程における資本の諸転化によって条件づけられている。他方では、生産過程の恒常的な更新は、資本が流通部面でつねに新たななしとげる諸転化の、すなわち資本が貨幣資本として、また商品資本として交互に出現する条件である。

*1 「草稿では「 $G \cdots W \cdots P \cdots W' \cdots G'$ 」となっている」

*2 「草稿では「 $P \cdots W' \cdots G \cdots W \cdots P$ 」となっている」

(352)

けれども、個々の資本はいずれも社会的総資本の自立化された、いわば個別的生命を与えられた一断片をなすにすぎず、それは、個々の各資本家が資本家階級の個別的一要素をなすにすぎないのと同じである。社会的資本の運動は、これらの資本の自立化された諸断片の運動の総体、すなわち個別諸資本の回転の総体から成り立つ。個々の商品の変態が商品世界の変態系列——商品流通——の一環であるのと同じように、個別資本の変態、その回転は、社会的資本の循環のなかの一環である。

この総過程は、生産的消費（直接的生産過程）ならびにそれを媒介する形態諸転化（素材的に見れば諸交換）とともに、個人的消費ならびにそれを媒介する形態諸転化または諸交換を包含する。それ

は、一方では、労働力への可変資本の転換を、それゆえ資本主義的生産過程への労働力の合体を包含する。ここでは、労働者は彼の商品である労働力の売り手として登場し、資本家はその買い手として登場する。しかし、他方では、商品の販売のうちには労働者階級による商品の購買、したがってこの階級の個人的消費が含まれている。ここでは、労働者階級は買い手として登場し、資本家は労働者への商品の売り手として登場する。

商品資本の流通は剰余価値の流通を含み、したがって、資本家たちの個人的消費、すなわち剰余価値の消費を媒介する売買をも含む。

したがって、社会的資本に総括されたものとしての個別諸資本の循環、すなわちその全体性において考察されたこの循環は、資本の流通だけではなく一般的な商品流通をも包括する。一般的な商品流通は、本来次の二つの構成部分からのみ成り立ちうる——（一）資本の独自の循環、および（二）個人的消費にはいり込む諸商品の循環、すなわち労働者が彼の賃銀を支出し、また資本家が彼の剰余価値（またはその一部分）を支出して入手する諸商品の循環がそれである。もちろん資本の循環は、剰余価値が商品資本の一部分をなす限り剰余価値の流通をも包括し、同じくまた労働力への可変資本の転換、労賃の支払いをも包括する。しかし、諸商品へのこの剰余価値と労賃との支出は、資本流通のいかなる環をもなすものではない——といっても、少なくとも労賃の支出はこの流通の条件なのではあるが。

第一部では、資本主義的生産過程が個別的過程として、さらにまた再生産過程として分析された

(353)

——すなわち、剰余価値の生産と資本そのものの生産とが分析された。資本が流通部面の内部でなしとげる形態変換および素材変換は、想定されはしたが、そこでは詳しく立ち入ることはなかった。したがって、資本家は一方では生産物をその価値どおりに販売し、他方では過程を新たに開始するかまたは連続して進めるための物的生産諸手段を流通部面の内部で見いだすものと想定された。われわれが第一部で詳論しなければならなかった流通部面内部の唯一の行為は、資本主義的生産の根本条件としての労働力の売買であった。

この第二部の第一篇では、資本がその循環中にとるさまざまな形態と、この循環そのもののさまざまな形態とが考察された。第一部で考察された労働時間に、いまや流通時間がつけ加わる。

第二篇では、「資本の」循環が周期的循環として、すなわち「資本の」回転として考察された。一方では、資本の相異なる構成部分（固定資本および流動資本）が相異なる時間に、相異なる仕方によって、諸形態の循環をいかに遂行するかが明らかにされた。他方では、労働期間と流通期間との長さの相違を条件づける諸事情が研究された。循環期間およびその構成諸部分の比率の相違が生産過程そのものの規模と剰余価値の年率とにおよぼす影響が明らかにされた。実際、第一篇では、資本がその循環中につねに身につけては脱ぎ捨ててる継起的諸形態が主として考察されたとすれば、第二篇では、諸形態のこの流れと継起との内部で、どのようにして与えられた大きさの一資本が、その規模は変わるにしてもともかく同時に生産資本、貨幣資本、および商品資本という異なる諸形態に分かれ、その結果、これらの形態が互いに入れ替わるだけではなく、総資本価値の異なる部分がつねにこれらの異なる状

(354)

態で並立して存在し機能するか、が考察された。ことに貨幣資本は、第一部では見られなかった独自性を帯びて現われた。一定の諸法則が発見された——それによれば、与えられた規模の生産資本をつねに機能させておくためには、与えられた一資本のうちの大きさを異にする構成諸部分が、回転の諸条件に応じて、つねに貨幣資本の形態で前貸しされ更新されなければならない。

しかし、第一篇でも第二篇でも、問題になったのは、いつも、ただ一つの個別資本であり、社会的資本の自立化された一部分の運動だけであった。

しかし、個別諸資本の循環は、からみ合い、前提し合い、条件づけ合っており、まさにこのからみ合いにおいて社会的総資本の運動を形成する。単純な商品流通の場合に、一商品の総変態が商品世界の変態系列の一環として現われたように、いまや個別資本の変態が社会的資本の変態系列の一環として現われる。しかし、単純な商品流通は必ずしも資本の流通を含まないのに——というのはそれは非資本主義的な生産の基礎の上でも行なわれうるのであるから——、すでに述べたように、社会的総資本の循環は、個々の資本の循環には属さない商品流通、すなわち資本を形成しない諸商品の流通をも含んでいる。

いまや、社会的総資本の構成部分としての個別諸資本の流通過程（この過程は、その総体において再生産過程の形態をなす）が、したがってこの社会的総資本の流通過程が、考察されなければならない。

第二節 貨幣資本の役割

（以下に述べることは、本篇のあとのほうの部分ではじめて取り扱われるべきではあるが、いままぐそれを研究することにした。すなわち、社会的総資本の構成部分として考察された貨幣資本が、それである。）

個別資本の回転の考察にあたって、貨幣資本は二つの側面から明らかにされた。

第一に、貨幣資本は、それぞれの個別資本が舞台にのぼり、資本としての過程を開始するさいにとる形態である。それゆえ貨幣資本は全過程に最初の衝撃を与える「原動力」として現われる。

第二に、回転期間の長さの相違およびその二つの構成部分——労働期間と流通期間——の比率の相違に応じて、前貸資本価値のうちつねに貨幣形態で前貸しされ更新されなければならない構成部分は、それが運動させる生産資本すなわち連続的な生産規模にたいする比率を異にする。しかし、この比率がどうであろうとも、過程進行中の資本価値のうちつねに生産資本として機能しうる部分は、前貸資本価値のうちつねに生産資本とならんで貨幣形態で実存しなければならない部分によって、どのような事情のもとでも制限される。ここでは、正常な回転だけが、抽象的平均だけが問題である。この場合、流通の停滞に即応するための追加的貨幣資本は度外視されている。

（355）
第一の点について。商品生産は商品流通を想定し、商品流通は商品の貨幣としての表示、すなわち貨幣流通を想定する。商品と貨幣とに商品が二重化することは、生産物の商品としての表示の一法則

である。同様に、資本主義的商品生産は——社会的に考察しても個別的に考察しても——新たに始まるなどの事業もの“原動力”としての、また連続的動力としての、貨幣形態の資本または貨幣資本を前提する。とくに流動資本は、動力としての貨幣資本が比較的短期間につねに繰り返し登場することを想定する。前貸資本価値全体、すなわち諸商品からなるすべての資本構成部分——労働力、労働諸手段、および生産諸材料——は、つねに貨幣で繰り返し購買されなければならない。ここで個別資本について言えることは、多数の個別資本という形態でのみ機能する社会的資本についても言える。しかし、すでに第一部で明らかにしたように、だからといって、資本の機能場面、すなわち生産の規模が、資本主義的基礎上でさえも、その絶対的制限という点で、機能中の貨幣資本の規模に依存するということには、決してならない。

資本には生産諸要素が合体されているが、これらの要素の伸長は、一定の限界内では、前貸貨幣資本の大きさには左右されない。労働力への支払いと同じでも、労働力は外延的または内包的に、より強度に搾取されうる。この搾取の強化につれて貨幣資本が増加される（すなわち賃賃が高められる）としても、搾取の強化に比例しては増加されず、したがって“同じ程度に”増加されることは決しない。

生産的に利用される自然素材——それは資本の価値要素を形成しない——すなわち土地、海洋、鉱石、森林などは、貨幣資本の前貸しを増加しなくても、同数の労働力の緊張を強めることによって、内包的または外延的に、より強度に利用される。こうして、生産資本の現実的諸要素は増加されても、